様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：４２６８０
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５３１１６４

研究課題名（和文）明治期国語教育の展開とヘルバルト派教育学に係る実証的研究

研究課題名（英文）An empirical study of Japanese language education in the Meiji Periodand Herbart's pedagogics

研究代表者
山本　康治（YAMAMOTO, KOUJI）

東海大学短期大学部・その他部局等・教授

研究者番号：１０３４１９３４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：明治３０年代にはその役割を終えたと言われてきたヘルバルト派教育学が、明治４０年代に至っても、教育実践の場において強い影響力を有していたことが明らかになった。北海道教育界等を中心とした調査を通して、東京高等師範学校（同付属小学校）、札幌師範学校（同付属小学校）、道内小学校との人的交流の実態、同教育学の提唱する「五段教授法」の受容と展開および変形の様相、また幼児教育と小学校教育の連続性について、同教育学からの影響を認めることが出来た。また、明治４０年代における文学教材の取扱いに関する議論に際して、同教育学が「美感の形成」という一定の方向性を示し、それが大正期の文芸教育に繋がることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：Herbart’s pedagogics, which seemed to complete the role in the Meiji 30s, had kept wielding influence over educational practice in the Meiji 40s. Our investigation of the education in Hokkaido has revealed that Herbart’s pedagogics had its influence over various aspects—a true picture of human exchange among Tokyo Koto Shihan Gakko (its affiliated elementary school), Sapporo Shihan Gakko (its affiliated elementary school), and elementary schools in Hokkaido, some phases such as acceptance, expansion, and transmutation of the method called “Godankai Kyojuhou,” or five steps pedagogics, and continuity between preschool education and elementary school education. In debate over the way of treating materials for literature in the Meiji 40s, Herbart’s pedagogics offered a new direction to “Bikan no Keisei,” or formation of a sense of beauty, which led to the literary education in the Taisho Period.

研究分野：教科教育学

キーワード：小学校国語教育　ヘルバルト　明治　文学教材　韻文　幼児教育　童話　談話

１．研究開始当初の背景

(1) 研究の背景

明治３３年の「改正小学校令」により「国語」科が成立し、その教材に文学教材が取り上げられるようになった。「同令施行規則」において、教材には新たに「心情ヲ快活純正ナラシムルモノ」かつ、「趣味ニ富ムモノ」として位置づけられ、国語教科書（検定教科書）の多くに、文学教材（童話、韻文、美文）が掲載されることになった。この流れを推し進めたのが、ヘルバルト派教育学（以下、同教育学）である。同教育学は、「趣味ある」ことを教育の中心に置き、児童の「美感」の形成を通して、「人格の陶冶」を目指す考えとして、東京高等師範学校を中心に強い教育的価値観を形成していた。明治３０年代に入り、全国に展開した同校出身の小学校・中学校教員および地方の師範学校教員らにより、同教育学を踏まえた教育実践が各地で推し進められていった。当時の教師向けの指南書には、例えば、「心情的修養ノ教材」（立柄教俊訳・ライン著『ヘルバルトチルレル派教授学』、明治３３年）の重要性の指摘など、同教育学が実践の場において指導的役割を果たしていた痕跡を見ることができる。しかしながら、同教育学が、明治期国語教育に与えた影響については、未だ明らかにされていないことが多く、国語教育に限らず、明治期の言語教育、言語文化全体に与えた影響についての研究は殆ど進んでいないのが現状である。

(2)研究の状況

既にこれまでの研究（「明治期国語教育とヘルバルト派教育学」、科研費基盤研究（Ｃ）、平成２０年～２３年度、課題番号２１５３０８１６）において、明治３０年代前半の「国語」科の授業実践に、同教育学の強い影響が見られ、「五段教授法」という定型化した教育手法と相まって、「品性の陶冶」を目指して、文学教材を重視した教育実践が全国各地に広がったこと、そしてその過程において各地の師範学校及び同付属小学校が教育モデルとして強く関わっていったことを実証的に明らかにした。（拙稿「明治期国語教育の展開－文学教育はどのようして生まれたのか－」、『可能性としてのリテラシー教育』、ひつじ書房、平成 23 年 10 月、及び『明治詩の成立と展開　学校教育との関わりから』、科研費研究成果公開促進費交付学術図書、平成 23 年 2 月刊行）。また、明治３０年代前半にそのブームを終えたといわれている同教育学の教育実践についても、明治４０年代において、教育実践の場への浸透はより広範に及んでいる事例も多く見つかっている。さらには、幼児に対する言語教育においても、「改正小学校令」と同時期に施行された「幼稚園保育及設備規程」には「徳性ヲ涵養」すべき「興味アル」「談話」を重視すべきという保育内容が示され、その結果、保育現場では、童話重視という方向性をもたらすことになり、同教育学を踏まえた小学校教育課程との繋がりも想定せざるを得ない状況である。（桑原（北川）公美子「明治期の北海道における小学校からみた幼稚園～ヘルバルト派教育学の流行の中で～」、「乳幼児教育研究」第 20 号、日本乳幼児教育学会、平成 23 年 12 月刊行）。このように、明治期の言語教育全体に同教育学の強い影響が見られることが明らかになりつつあるが、そのような方向付けの原点である「改正小学校令」自体が同教育学の強い影響のもと、策定されていった可能性までもが明らかになってきた。

２．研究の目的

明治期の国語教育に文学教材が導入されていった契機となったのは、ヘルバルト派教育学によってである。本課題研究では、「国語」科成立自体に同教育学が直接関わったこと、また明治４０年代においても、教育実践の場においては同教育学に依拠した内容・方法が広く行われてきたこと、更には、幼児教育の分野においても、童話重視という方向性をもたらしたことなどを実証的に明らかにすることで、明治の言語教育全般に同教育学が与えた影響について検証し、その次の時代（大正）の文化を支えた、日本人のメンタリティ形成に与えた影響を明らかにするとともに、現代にまでつながる日本近代文化の系譜の一端を明らかにするものである。

３．研究の方法

本課題研究は、以下の三つの「研究系列Ａ～Ｃ」により構成されている。

(1)［研究系列Ａ：<u>「国語」科成立に与えたヘルバルト派教育学の影響</u>］

「改正小学校令」の策定・導入の中心的な役割を果たし、「国語」科成立の中心となったのは、当時の文部省学務局長澤柳政太郎である。澤柳は、日本に初めてヘルバルト派教育学を紹介したハウスクネヒトから、直接その講義を受け、明治２６年には、ヘルバルト派教育学者ヘルマン・ケインの『格氏教育学』の翻訳を成している。このような同教育学を学んだ澤柳が、ことある毎に同翻訳書を挙げ、後に至るまで、「言語教授の道徳上或は美育上に於ける関係を等閑に付する如きことがあつては、甚だ遺憾なることと言はなければならぬのである」（明治４２年『実際的教育学』）と同教育学に依拠したことを述べていることは重要である。これまで「改正小学校令」は、澤柳が中心となり策定されたことは分かっているが、彼の思想と同教育学の関係を踏まえて「国語」科の成立の背景を捉えた見解は、管見によれば皆無である。しかしながら、以上に示したように、「国語」科の成立過程、そしてその方向性に同教育学が関わっていた可能性は極めて高いと考えられる。研究系列Ａでは、澤柳政太郎の思想的解明、実証的調査等を通して、当時の文教政策の状

況も含めて、「国語」科成立の詳細なプロセス及びその背景を明らかにするとともに、同じ方向性を持つ「幼稚園保育及設備規程」についても、同様の調査を行う。

(2)［研究系列Ｂ：明治４０年代国語教育実践に係るヘルバルト派教育学の影響］

教育学史研究の定説においては、明治３０年代後半には、ヘルバルト派教育学は既にその役割を終え、ナトルプらの社会的教育学にその重心が移ったとされている。しかしながら、実際の小学校の教育現場においては、同教育学を踏まえた教育実践を多く見ることができる。第一期国定教科書（明治３７年）において、一旦否定された文学教材重視の方向性は、第二期国定教科書（明治４３年）において、再び肯定され、文学教材を重視した国語教育実践が多く見られるようになっていくのである。その際の教育実践において同教育学を踏まえていることが、当時の教育雑誌、教案、教師の日誌等から散見されている。本研究系列において、改めてその実態を捉え、どのような教育実践が行われていったのかを実証的に明らかにすることが必要である。対象地域としては、同教育学の教育現場への展開が最も進んでいた北海道教育界を取り上げる。北海道教育界は、札幌師範学校校長槇山栄次により、同教育学を重視した教員養成及び教員研修が行われ、同付属小学校においては、同教育学に依拠した研究授業等が常に行われている状況であった。当時の資料から、研修の内容、研修参加者とその所属等も示されており、また、彙報等により人事異動についても明らかになっている。同教育学の北海道教育界での浸透の過程を実証的に明らかにすることで、明治４０年代において、同教育学がどのような教育的効果を持ち得たのかを明らかにする。

(3)［研究系列Ｃ：明治期言語教育実践の場における文学教材（童話・韻文）ついての研究］

ヘルバルト派教育学の中心であったライン、ツィラーらは、国民教育の教材として童話や韻文を重視しており、その反映として、小学校では、「品性を陶冶」するため、低学年では童話を、高学年では韻文や美文を重要視する傾向を生んだ。一方、フレーベルをその教育の中心に据えていた幼稚園教育においては、同教育学から直接の影響は見られないとするのが一般的である。しかしながら、先に示したように、「徳性ヲ涵養」するための「談話」、その中でも「童話」による教育が重視されていること、また実際に小学校教育を意識した形で「グリム童話」が幼稚園で導入しようとして事例があることなどから、幼稚園においても、小学校同様に、同教育学を踏まえた同じ気圏において、言語教育が展開されていたと推測することができる。そこで、幼稚園、小学校という言語教育実践の場において、童話や韻文、美文といった文学教材がどのように用いられていったのか、そこに同教育学がどのように関わっていったのかを明らかにすることで、明治期の言語教育全般に与えた同教育学の影響を明らかにする。具体的には、当時の教育雑誌等に示される、文学教材に関する記事、教案等に対する実証調査により行うこととする。

４．研究成果

(1)［研究系列Ａ：「国語」科成立に与えたヘルバルト派教育学の影響］については、以下の①～④の研究成果を得た。

①「改正小学校令」の策定・導入の中心的な役割を果たし、「国語」科成立の中心となった澤柳政太郎の教育思想の中核にヘルバルト派教育学の影響を見ることが出来た。例えば、明治４３年に出された『我国の教育』においては、「ヘルバルト派の教育は（略）人物養成品性陶冶と云ふものを教育の最高の目的として居るから、丁度此の説は当時の教育の精神と一致して、日本に歓迎され、非常に発達して、今日尚勢力を振つて居る。此の教育学説が、道徳教育の傾向を助け、益々道徳教育を確立せしむるに至つた。」との認識が示され、澤柳が重視する、「道徳教育」（修身教育）を支えるものとして同教育学が積極的に位置付けられていたことを明らかにした。

②「国語」科成立に影響を与えた澤柳政太郎の教育思想、および他の教育学者等の言説分析を通して、「国語」科（第二期国定教科書、明治４３年）における文学教材増加、また「修身」科における文学教材の採択など、これまで明治３０年代末にはその役割を終えたと言われていた同教育学が、明治４０年代においても、教育界全般に強い影響力を示していたことが確認された。

③さらに、明治４０年代の第二期国定教科書の成立過程および同教科書の使用に際して、同教育学が与えた影響についての調査を通して、文学教材の位置づけとして、修身的教訓教材として扱うのか、文学的情緒を育む教材として扱うのかという、二項対立的な構造が形成されており、その過程に同教育学が深く関わっていたことが確認された。特に、文学的情緒を育む教材の教案として、同教育学に依拠した段階教授法が採用されている事例から、同教育学が、文学教育実践に強い影響を与えていたことが実証的に確認された。更に、このことから、大正期に大きく展開した文学教育に繋がる流れとしてこれらを捉えることの可能性が示された。

④幼稚園教育とヘルバルト派教育学との関係については、これまでほとんど論じられてこなかった。しかし、「幼稚園保育及設備規

定」成立に関しても、澤柳を始め、小学校教育関係者が深く関わっていたことが明らかとなった。また、同教育学の影響を色濃く受けた小学校の普及に伴い、小学校教育と深いつながりのなかで動いていた幼稚園教育が教育課程として前景化してくる様相も明らかになり、今後、より全国的な事例収集の必要性が示唆された。

(2) ［研究系列Ｂ：明治４０年代国語教育実践に係るヘルバルト派教育学の影響］については、以下の①～④の研究成果を得た。

①北海道教育界においては、札幌師範学校を中心として、教員養成及び教員研修、および同付属小学校における同教育学に依拠した研究授業等が展開されており、教員の人的交流を中心に、東京高等師範学校と密接な関わりが明らかになった。このような人的交流については、北海道のみならず、他の府県によっても確認されており、今後、探究すべき課題として把握された。

②東京高等師範学校、同附属小学校での実践事例が、札幌師範学校、同付属小学校を通して、北海道教育界の実践範型に展開していく事例が散見され、明治４０年代においても同教育学のネットワークの有効性が確認された。

③この過程において、研究系列Ａ③に示した、文学教材の位置づけに関する「二項対立的な構造」を示す議論、または実践が教育実践の場においてもなされていたことが明らかとなった。今後、これまで大正期を中心に考えられていた「文芸教育」についてもより広範に調査、確認することの必要性が示された。

④さらに、北海道教育界において同教育学が教育実践の場に展開、定着していく過程において、同教育学の提唱した五段教授法が変形・定着していった実態が把握された。今後、他の地域における同教育学実践事例の展開・定着に関する調査研究の必要性が示された。

(3) ［研究系列Ｃ：明治期言語教育実践の場における文学教材（童話・韻文）ついての研究］については、以下の①～③の研究成果を得た。

①小学校教育については、近代韻文がどのように導入され、どのように教えられていったのかについて、その変遷を明らかにした。明治４０年代からは、児童が対象と一体化することで美感の形成を図る実践が散見され、これがヘルバルト派教育学の五段教授法の継承・発展した方法に基づいていることが明らかになった。

②幼稚園教育においては、その保育内容の修身、唱歌、遊戯が、当時の小学校教育と同様に、軍歌との繋がりの中で展開されていたことが当時の保育日誌の分析から明らかとなり、幼稚園教育初期の段階において、小学校教育との連続性があったことが確認された。また、北海道教育界においては、函館幼稚園が幼小連携を視野に入れた中で創設されたことなど、当時の幼稚園教育と小学校教育との連携事例が挙げられ、教育内容となる童話を通した学びの連続性についての示唆が得られた。

③幼稚園教育と小学校教育における、童話、特にグリムおよびアンデルセン童話の受容と展開については同教育学が積極的に関わっており、そのような教育におけるグリムおよびアンデルセン童話の普及と定着が日本の児童文学の開花期への導火線となったことが明らかとなった。今後、より詳細にその過程を分析することの必要性が示された。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）


① 山本康治、明治期北海道教育界におけるヘルバルト派教育学の展開、東海大学短期大学部紀要、査読有、48 号、2015、43-50

② 桑原（北川）公美子、明治期のアンデルセン童話教育～ヘルバルト派教育学との関わりから～、児童文学研究、査読有、第 47 号、2015、21-34

③ 山本康治、明治期国語科における文学教材の取扱いについて―修身科との違和と融和―、湘南文学、査読無、第 49 号、2014、179-192

④ 山本康治、教育から見た「文芸教育」論争―片上伸「文芸教育論」を巡って―、文学・語学、査読有、第 209 号、2014、40-52

⑤ 山本康治、明治末から大正期における小学校国語教育へのヘルバルト派教育学の影響について、東海大学短期大学部紀要、査読有、47 号、2014、35-43

⑥ 桑原（北川）公美子、大正期の「学級日誌」にみる小学校教育の実際－岡谷市立長地小学校－（資料）、東海大学短期大学部紀要、査読有、47 号、2014、81-88

⑦ 桑原（北川）公美子、明治期『婦人と子ども』にみる幼小の関係―教育体系の中に位置付けられるための幼稚園とは―、乳幼児教育学研究、査読有、第 22 号、2013、11-18

⑧　桑原（北川）公美子、明治期の幼稚園教育と「童話」―ヘルバルト派教育学の影響下で―、保育学研究、査読有、第 51 巻、2013、17-25

〔学会発表〕（計３件）
①　桑原（北川）公美子、北海道の幼稚園～函館幼稚園と武藤八千、日本保育学会第６８回大会　2015 年 5 月 9 日、椙山女学園大学（名古屋）

②　桑原（北川）公美子、明治期幼稚園教育の実際（その１）－山梨師範学校附属小学校附属幼稚科－、日本保育学会第６７回大会、2014 年 5 月 17 日、城南学園総合体育館（大阪）

③　桑原（北川）公美子、明治期の幼稚園教育観―『婦人と子ども』の調査から―、日本保育学会第６６回大会、2013 年 5 月 11 日、中村学園大学（福岡）

６．研究組織
(1)研究代表者
山本　康治（YAMAMOTO　KOUJI）
東海大学短期大学部・教授
研究者番号：１０３４１９３４

(2)研究分担者
桑原（北川）　公美子（KUWAHARA　KUMIKO）
東海大学短期大学部・准教授
研究者番号：００２９９９７６